平成 30 年度
地域課題調査・研究事業

福島県における乳幼児を持つ父親の育児の現状と支援対策

福島県男女共生センター

平成 30 年度福島県男女共生センター
地域課題調査・研究事業報告書

研究課題：

福島県における乳幼児を持つ父親の

育児の現状と支援対策

代表者：

福島県立医科大学大学院医学研究科国際地域保健学

吉田和樹

共同研究者：

福島県立医科大学総合科学教育研究センター

後藤あや

I. はじめに

男女共同参画社会の推進には父親の育児参加も重要である。父親の育児参加は経年的に増加しているが（日本小児保健協会，2011）、他国と比較しても育児時間は極めて短い（内閣府）。特に福島県は、父親の家事関連時間が 47 都道府県中 46 位であり短く（総務省統計局）、平成 28 年の労働時間は全国 1 位（厚生労働省，2017）であり、父親の仕事と育児の調和が課題である。これらのことから、福島県における男女共同参画社会の推進には自治体と職場での対策を強化すべきである。

東日本大震災後の福島県の母親の産後うつ傾向の割合は減少傾向にあるがいまだ高い。育児中の父親おいても母親同様にうつ傾向に陥り(Luoma et al, 2013)、父親の育児参加は子どもの発達に影響を及ぼすため、子どもの健やかな成長・発達を促す上でも、母親のみだけでなく父親の健康の保持増進および育児参加推進は重要である。父親の仕事と育児の調和が改善されることで母親の精神的健康度の促進にもつながる。そのため、母子保健と産業保健の取り組みが連携して仕事と育児の調和の工夫を考慮した職場での子育て支援が求められる。しかし、父親の育児支援については育児支援の重要性を裏付ける知見の蓄積にとどまり、具体的な育児支援の立案、評価に関する知見は乏しい。

本研究では、これまでに自治体と共同で行った父親の育児調査の結果から（表 1-1、1-2）、父親は育児に 9 割以上が参加しているものの、6 割以上もが育児に自信がないと回答しており、さらに 3 割近くが育児についてかっこいいとポジティブなイメージを持てないと回答した。この結果をもとに教育・医療機関で講演をして、参加者と父親の育児支援の実践について検討し、その上で育児講座を立案して試行することを目的とした。

本研究の意義は、父親の育児支援の実践推進に寄与するところにある。自治体における育児困難や虐待の予防、そして少子化等の緊急課題に対し、本研究の知見に基づく主に父親の育児支援推進による解決策を提案することができる。本研究結果は、報告書を作成するほかに、実施団体を対象とした報告会を行う。このことにより、実施団体に所属する職員を対象とした男女共同参画啓発の機会にもなると期待できる。

II. 研究方法

1. 育児講座の立案：育児講座について検討する講演会を、教育機関および医療機関で実施した。
2. 研究デザイン：前後比較介入研究（研究の概要を図 1 に示す）
3. 対象者

本研究は介入の試行であり、乳幼児を育児中の父親だけでなく、親準備期の男

性も対象とし、16 名（育児中の父親：10 名、親準備期にある男性：6 名）が参加した。

4. 調査方法

育児調査の結果をもとに共同研究者と父親を対象とした育児支援講座を立案して試行し、無記名式自記式アンケートにより評価する。

5. 調査項目：

1） 調査項目：親準備期の男性には下記の項目のうち、基本属性、健康状態、育児に対する考え方（育児をしている男性をかっこいいと思いますか)、育児参加意識・行動（母子健康手帳を開けて中を見たことがある、母子健康手帳がどこに置いてあるのかを知っている)、講座評価、自由記述のみ回答を求めた。

(1) アンケート（講座前）

基本属性は児の特徴（性別、子どもの数、育てやすさ)、親の特徴（年齢、就労状況)、家族構成（核家族・拡大家族)、どのような職業ですか（第 2 回 21 世紀成年者縦断調査：平成 24 年成年者)、あなたの職場は、子育てと仕事が両立しやすい環境が整っている方ですか（夫婦の出生力の低下要因に関する分析：2013)、あなた自身は子どもの頃から愛着を受けて育ったという実感がありますか（東京都南多摩保健所, 子どもの虐待予防スクリーニング活用の手引きー平成 17 年 3 月ー）について回答を求めた。

健康状態は、あなたの体調はいかがですか、あなたの気持ちの状態はいかがですか（東京都南多摩保健所, 子どもの虐待予防スクリーニング活用の手引きー平成 17 年 3 月ー）について回答を求めた。

赤ちゃんへの気持ち（ボンディング）は Yoshida et al（2012）らの 10 項目を用い、回答を求めた。育児に対する考え方は、お母さん、お父さんで育児や家事を協力して行っていますか、育児している男性をかっこいいと思いますかについて回答を求めた。

育児参加意識・行動は、お子さんの育児をしていますか（幼児健康度に関する継続的比較研究　平成 22 年度総括・分担研究報告書, 2011)、あなたは一日の中で、家事、育児・子どもの世話に何時間くらい費やしていますか。平日と休日に分けてお答えください（第 3 回 21 世紀成年者縦断調査：平成 24 年成年者)、あなたは子育てに自信が持てないことがありますか（健やか親子 21)、あなたは子どもとの生活に対して満足していますか（夫婦の出生力の低下要因に関する分析：2013）について回答を求めた。

育児情報検索は、母子健康手帳がどこに置いてあるのかを知っている、母子健康手帳を開けて中を見たことがある、ここ 1 週間で育児に関する情報を検索したについて回答を求めた。自由記述は、あなたが考えるこれからの育児に必要な

ことは何ですかについて回答を求めた。

(2) アンケート（講座後）

前後比較のために、赤ちゃんへの気持ち（ボンディング）、育児している男性をかっこいいと思いますか、あなたは子育てに自信が持てないことがありますかについて回答を求めた。自由記述は、講座を受けてこれからの育児に役に立つと思ったことは何ですかについて回答を求めた。講座評価は、配布資料は適切であった、時間配分は適切であった、進行は適切であった、講義内容は理解できた、講義は今後の育児に役立つと思う、話し合いは育児に役立つと思う、講座参加前よりも、育児への自信が増したについてそれぞれ回答を求めた。

6. 分析

講演会の感想は類似した内容をまとめ、グループに命名した。育児講座実施前後の量的データは統計ソフトを用いて集計した。本年度は講座の企画に主眼を置いたため、本報告では講座の参加者評価と、育児の自信と育児をかっこいいと思うかの前後比較の結果を提示し、ボンディングなどその他の育児状況の指標を用いた効果比較については次年度以降に詳細な分析を行う。

7. 倫理的配慮

本研究は、福島県立医科大学倫理委員会の承認を得て実施した（一般：30219）。

III. 結果

1. 講演会

育児講座を企画するための一環として実施した講演会の回数を表 2、参加者の感想を表 3 に示す。育児講座の立案するための講演会を 6 か所で実施し、参加者は計 151 名以上であった。

2. 育児講座の概要

育児講座の概要を表 4 に示す。また、育児講座の案内、配布資料、様子を図 2～4 に示す。

3. 育児講座に参加した対象者の特性

育児講座は 3 か所で実施し、16 名が参加した。育児中の父親の平均年齢（最小-最大）は、36.7（29-43）歳であり、初産は 3 名（30.0%）であった。親準備期にある男性の平均年齢（最小-最大）は、27.0（23-34）歳であり、既婚は 2 名（33.3%）であった。気持ちの状態が不良の育児中の父親は 5 名（50%）、親準備期にある男性は 3 名（50%）であった。子育てと仕事が両立しやすい環境が整っていない育児中の父親は 4 名（40%）、親準備期にある男性は 3 名（60%）であった。

4.　参加者の講座評価

参加者の講座評価は表 5 に示す。育児中の男性および親準備期にある男性ともに、配布資料は適切であった、時間配分は適切であった、進行は適切であった、講義は適切であった、講義は今後の育児に役立つと思う、話し合いは育児に役立つと思うにそう思うと回答した割合は、100%であった。講座参加前よりも育児への自信増したについてそう思う育児中の父親は、6 人（60.0%）、親準備期になる男性は 5 人（83.3%）であった。

5.　講座参加前後の比較

講座参加前後の比較を表 6 に示す。育児中の父親の育児をしている男性をかっこいいと思う、育児の自信の割合は講座前後で変化はなかった。親準備期にある男性においても、育児をしている男性をかっこいいと思うかについて講座前後で割合に変化はなかった。

6.　参加者の育児に役立つと思ったこと

育児中の父親と親準備期にある男性の育児役立つと思ったことを表 7 に示す。

7.　リーフレットの配布

作成したリーフレットを図 5 に示す。また、本育児講座で作成したリーフレットを表 8 の通り、配布した。

IV. 考察

1.　参加者の講座評価

育児中の父親および親準備期にある男性は本育児講座に対する満足度が高かったことから、講演会で検討を重ねて立案した本講座は、参加者のニーズにあっていたと考えられる。

育児講座実施後に育児の自信が高まった割合は、親準備期にある男性の方が高かった。また、親準備期にある男性から、先輩パパの話が聞けてよかった、他のパパとの話し合いや悩みの共有、解決にもつながりよりよい育児が可能になる等と、育児に対する前向きな意見があった。このことは、育児中の父親および親準備期にある男性を同じグループとして演習を行った成果と言える。

一方、育児期の男性では育児の自信が高まった割合が 6 割と親準備期より低く、育児をかっこいいと思うかどうかの割合は両群に変化は見られなかった。そのため、特に育児中の父親の育児の自信を高める工夫と、男性が育児にポジティブなイメージを持てるような工夫をする必要があると思われる。

2.　リーフレットの活用

本研究で開発したリーフレットを自治体等へ配布することにより、支援が必要な父親へのアクセス方法や父親の背景を考慮した支援の在り方について検討することが重要と言った意見が聞かれ、保健従事者間で父親の育児支援について意見交換する機会となりうる。さらに自治体がリーフレットを育児相談で活用することにより、母親だけでなく、父親、さらには家族全体に目を向けたより包括的な支援につながる可能性がある。

3.　研究の限界と課題

本研究への参加者は育児への意識が高い男性であった可能性が高く、参加者も少なかったことから解釈には注意を要する。しかし、気持ちの状態が不良の男性も参加していたことから、精神健康度が決して好ましいとは言えない男性も参加できる講座であり、育児支援および健康支援の機会にもなる可能性がある。今後は本育児講座を継続的に実施し、参加者数を増やし、介入前後の変化を育児状況の指標を用いてより詳細に分析することで効果を検証する。

文献

1. 日本小児保健協会．幼児健康度に関する継続的比較研究　平成 22 年度総括・分担研究報告書　2011. http://www.jschild.or.jp/book/pdf/2010_kenkochousa.pdf(参照 2019 年 3 月 25 日).
2. 内閣府．夫の協力　6 歳未満の子供を持つ夫の家事・育児関連時間(1 日当たり・国際比較). https://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/data/ottonokyouryoku.html(参照 2019 年 3 月 25 日)
3. 総務省統計局．平成 23 年社会生活基本調査結果．https://www.e-stat.go.jp/stat-search/database?page=1&layout=datalist&toukei=00200533&tstat=000001050585&cycle=0&tclass1=000001050588&tclass2=000001052118&tclass3=000001052126&statdisp_id=0003066936&survey=%E7%A4%BE%E4%BC%9A%E7%94%9F%E6%B4%BB%E5%9F%BA%E6%9C%AC%E8%AA%BF%E6%9F%BB&result_page=1&second=1&second2=1(参照 2018 年 9 月 15 日).
4. 厚生労働省．毎月勤労統計調査地方調査結果　平成 28 年年平均分結果概要．http://www.mhlw.go.jp/toukei/itiran/roudou/monthly/28/year.html(参照 2018 年 9 月 15 日).
5. Luoma et al. Fathers' postnatal depressive and anxiety symptoms: an exploration of links with paternal, maternal, infant and family factors. Nordic Journal of Psychiatry. 67(6). 407-13.2013.
6. 厚生労働省．第 2 回 21 世紀成年者縦断調査(平成 24 年成年者). https://www.mhlw.go.jp/toukei/chousahyo/seinen-b-25.pdf (参照 2019 年 3 月 25 日).
7. 内閣府経済社会総合研究所．夫婦の出生力の低下要因に関する分析～「少子化と夫婦の生活環境に関する意識調査」の個票を用いて～. 2013.
8. 東京都南多摩保健所．子どもの虐待予防スクリーニングシステム活用の手引き—平成 17 年 3 月—.
9. Yoshida et al. A Japanese version of mother-to-infant bonding scale: factor structure, longitudinal changes and links with maternal mood during the early postnatal period in Japanese mothers. Archives of Women's Mental Health. 15(5). 343-52. 2012.
10. 厚生労働省．第 3 回 21 世紀成年者縦断調査(平成 24 年成年者). https://www.mhlw.go.jp/toukei/chousahyo/seinen-b-26.pdf (参照 2019 年 3

月 25 日).
11. 厚生労働省.「健やか親子 21」最終評価報告書.
https://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/0000030713.html(参照 2019 年 3 月 25 日).

表 1-1　育児講座の立案の根拠：先行研究結果（対象者の特性）

	n	(%)
両親の特徴		
父親		
年齢		
30 歳未満	134	(26.8)
30 歳以上	364	(72.8)
仕事の量的負担		
中央値（最小-最大）	2 (1-4)	
仕事		
あり	493	(98.6)
なし	4	(0.8)
体調		
良好	325	(65.0)
不良	175	(35.0)
精神的健康		
良好	380	(76.0)
不良	119	(23.8)
母親		
年齢		
30 歳未満	191	(38.2)
30 歳以上	309	(61.8)
仕事		
あり	273	(54.6)
なし	225	(45.0)
体調		
良好	359	(71.8)
不良	141	(28.2)
精神的健康		
良好	421	(84.2)
不良	77	(14.8)
家族の特徴		
家族構成		
核家族	411	(82.2)
拡大家族	78	(15.6)
家族問題		

経済問題		
なし	450	(90.0)
あり	50	(10.0)
人間関係問題		
なし	427	(85.4)
あり	73	(14.6)
父親の育児環境		
相談できる機関と人		
いる	487	(97.4)
いない	13	(2.6)
協力をお願いできる機関と人		
いる	490	(98.0)
いない	9	(1.8)
児の特徴		
性別		
男児	259	(51.8)
女児	240	(48.0)
出生順位		
経産	236	(47.2)
初産	264	(52.8)
出生体重		
2500g 以上	460	(92.0)
2500g 未満	40	(8.0)

n=500
欠損値あり

表 1-2　育児講座の立案の根拠：先行研究結果（父親の育児状況）

	人数	割合
育児の自信		
あり	173	(34.7)
なし	325	(65.3)
育児参加		
している	463	(92.8)
していない	36	(7.2)
育児をしている男性を かっこいいと思う		
そう思う	355	(72.2)
そう思わない	137	(27.8)

n=500
欠損値あり

表 2　先行研究結果を活用した講演会開催回数

日時	場所	対象	参加人数
2018 年 8 月 24 日	福島県	助産師養成課程（学生）	17 名
2018 年 9 月 1 日	福島県	医療機関（看護職）	21 名
2018 年 9 月 8 日	福島県	小学校（保護者）	60 名*
2018 年 9 月 11 日	福島県	小学校（教員）	約 5 名
2018 年 11 月 28 日	山梨県	看護系大学（学生）	約 40 名
2019 年 2 月 26 日	スウェーデン	リンネ大学（学生）	8 名

*アンケート回答者数

表 3　講演会参加者の感想

学生の感想を以下に示す。
父親の育児状況を理解することができた（11）。
看護職としてのデータの活用・解釈について理解することができた（6）。
看護職が実施する地域診断のプロセスを理解することができた（5）。
国際保健への意識が高まった（1）。
医療機関の看護職の感想を以下に示す。
父親がおかれている育児状況を把握することができた（19）。
父親が考える育児への関心が高まった（5）。
両親単位で考える視点の大切さを知ることができた（4）。
祖父母を対象とした育児支援に対する意識が高まった（2）。
育児は育児環境と子どもの特徴により異なる視点を養うことができた（1）。
小学校で開催した際の感想を以下に示す。
家族間の関り方の方向性を見出すことができた（13）。
父親の育児状況を把握できた（4）。
夫婦の話し合いを大切にする意識が高まった（1）。
父親の考える育児に関心が高まった（1）。

類似した内容をまとめ、グループに命名した。()はグループに含まれる文章数を示す。

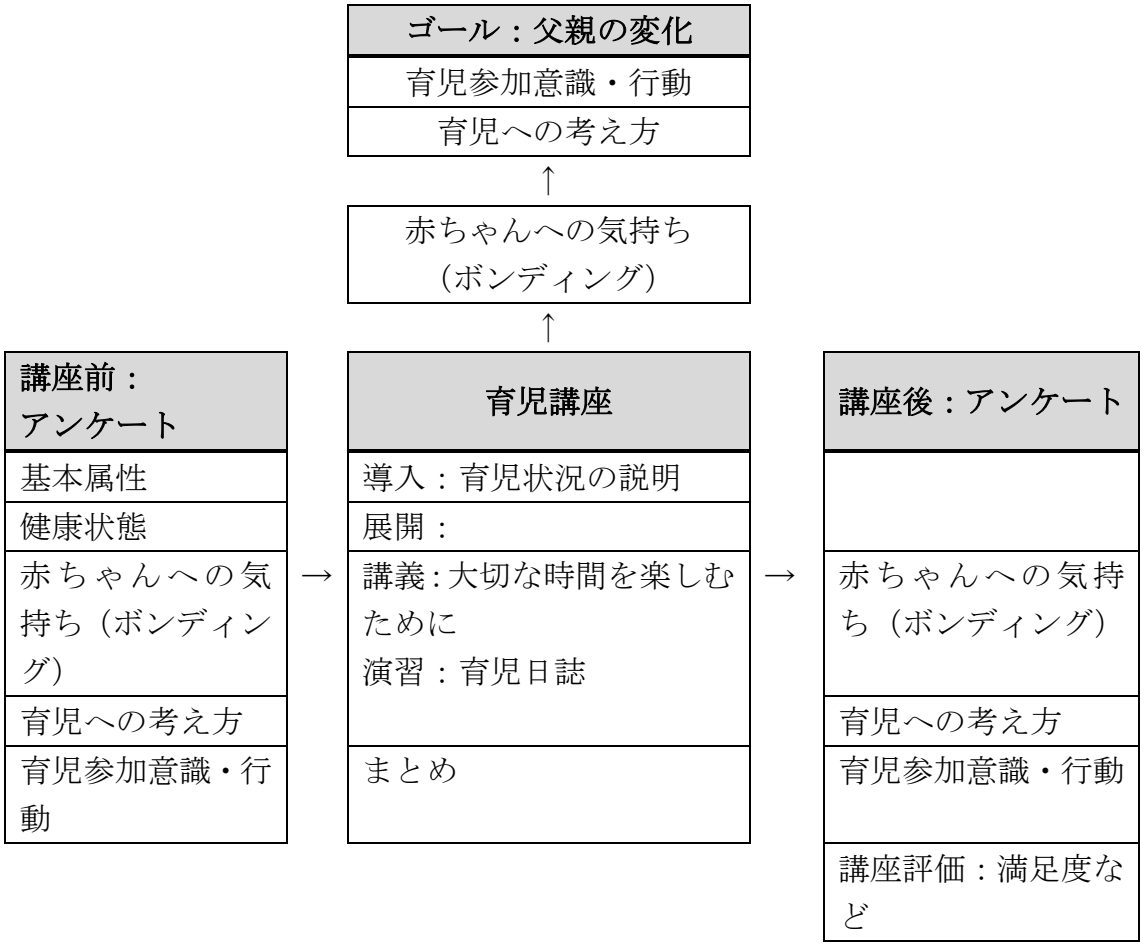
ゴール：父親の変化
育児参加意識・行動
育児への考え方
↑
赤ちゃんへの気持ち
（ボンディング）
↑
講座前：
アンケート
基本属性
健康状態
赤ちゃんへの気持ち（ボンディング）
育児への考え方
育児参加意識・行動
→
育児講座
導入：育児状況の説明
展開：
講義：大切な時間を楽しむために
演習：育児日誌
まとめ
→
講座後：アンケート
赤ちゃんへの気持ち（ボンディング）
育児への考え方
育児参加意識・行動
講座評価：満足度など

図１　研究の概要

表 4　育児講座の概要

手順	所要時間		内容
1		事前準備	・　会場設営
			・　資料配布
2	5 分	はじめに	・　あいさつ
			・　研究の説明
			・　本日の流れ
3	5 分		・　アンケート（講座前）
4	40 分	講座実施	・　講義（15 分） 父親の育児状況など
			・　演習（25 分） 育児日誌
5	5 分	まとめ	・　振り返り
6	5 分		・　アンケート（講座後）

表 5　育児講座への満足度：人数（%）[1]

項目	育児中の父親 そう思う （n=10）		親準備期にある男性 そう思う （n=6）	
配布資料は適切であった	10	(100)	6	(100)
時間配分は適切であった	10	(100)	6	(100)
進行は適切であった	10	(100)	6	(100)
講義は適切であった	10	(100)	6	(100)
講義は今後の育児に役立つと思う	10	(100)	6	(100)
話し合いは育児に役立つと思う	10	(100)	6	(100)
講座参加前よりも育児への自信増した	6	(60)	5	(83.3)

1: そう思う、大いにそう思うを、そう思うとし、割合を示した

表 6　講座参加前後の比較：n(%)

項目	育児中の父親（n=10）		親準備期にある男性（n=6）	
	講座前	講座後	講座前	講座後
育児の自信				
あり	3(30)	3(30)	-	-
なし	7(70)	7(70)	-	-
育児をしている男性をかっこいいと思う				
そう思う	5(50)	5(50)	6(100)	6(100)
そう思わない	5(50)	5(50)	0(　0)	0(　0)

表 7　参加者の育児に役立つと思ったこと

育児中の父親
育児の出来事を振り返ることで更に愛着がわくので日誌を活用するといいと思いました。父親同士の意見交換（できらいいなですが)。具体的にやってみること（5 分でも父母の会話、忙しい時でも体を向けて応じる)。育児日誌を書いてみること。無理せずにできることを、できる限りでやること。パパママと呼ばれたらしっかり子どもの顔を見てあげようと思います。妻と会話する。自分らしく生きる。子どもには全力で応える。パパ、ママと声をかけられたら「体を向けて」向き合うことが大切。ついつい「ちょっと待って」と言っちゃいます。話を聞くこと。
親準備期にある男性
もし、結婚してこどもができたときの心構え。育児のイメージ。とにかく言葉にして話すことが大切だと思いました。母親（ママ）とも、同僚や育児経験のある男性などとも話すこと。今は子どもがいないので想像のなかですが、今日の経験はきっと育児に役立つものとなりました。まねして自分のやり方をする。妻に許可をとって、自分の好きなことをやる時間をつくる。母を労わる。先輩パパの話が聞けてよかった。世界の国々と比べると日本の育児時間は短いので全体的にもっと子どもとふれあう時間をつくる意識が高まった。他のパパとの話し合いや悩みの共有、解決にもつながりよりよい育児が可能になると思った。父親として、どのように育児に関わっていくのが良いかということが良くわかった。また、育児の出来は父親と母親で異なるということも良くわかった。話し合いを大切にしていきたい。先輩パパたちのリアルな一日を聞くことができた。それぞれ悩みはあるようだが、とても楽しそうに話していたので育児が楽しみになった。

福島県立医科大学

父親の育児講座

～大切な時間を楽しむために～

子どもの健やかな成長と発達には父親の育児参加と健康が重要です。

お子さんとの大切な時間を楽しみながら子育てすることを目指した講座です。

日時：2019年3月18日(月)17時45分～(受付17時30分)

会場：磐田市役所大会議室

内容：講義と演習は1時間程度で、毎日を振り返り、育児のコツを一緒に考えます。
親子で使えるグッズ付き

参加者(定員)：子育て中のお父さん・親準備期にある男性(保健師を含む)　10名

先着順、定員になりしだい締め切り

申込締切：2019年3月11日（月）17時

- 以下の申込先にメール（件名に磐田市育児講座と明記の上、本文に参加者ご本人のお名前、お子さんがいらっしゃる方はお子さんの年齢）でお申込みください。
- 申込受付完了のメールを送付します。

申込先・問い合わせ先
担当：福島県立医科大学大学院医学研究科
国際地域保健学　古田和樹
連絡先：024-547-1835
メールアドレス：kazuki-y@fmu.ac.jp

本育児講座は福島県男女共生センターの地域課題・調査研究事業の一環として開催します。
（福島県立医科大学倫理委員会の承認を得て実施します：一般30219）

実施：福島県立医科大学大学院医学研究科国際地域保健学

図２　育児講座案内

図 3　配布資料

図 4　育児講座の様子

図 5　リーフレット(お父さんへ:育児のすすめ)

表８　主なリーフレットの配布先

福島県立医科大学付属病院性差医療センター
福島県立医科大学看護学部
福島県立医科大学医学部健康リスクコミュニケーション学講座
福島市
福島市内保育所
飯舘村
福島県保健福祉部
福島県県北保健福祉事務所
福島県県中保健福祉事務所
福島県県南保健福祉事務所
福島県相双保健福祉事務所
福島県会津保健福祉事務所
福島県南会津保健福祉事務所
福島県警
いわき市
いわき市社会福祉協議会
特定非営利活動法人地域福祉ネットワークいわき
いわき市内保育所
二本松市
二本松市内保育所
福島県男女共生センター
太田熱海病院
岩手県
山形県鶴岡市
宮城県南三陸町
宮城県登米市
茨城県日立市
茨城県水戸市
茨城キリスト教大学
埼玉県教育局福利課
埼玉学園大学
金沢大学
千葉県
首都大学東京
山梨県富士吉田市

富士吉田市内保育所
山梨県富士河口湖町
山梨県忍野村
山梨大学
昭和大学
横浜市
川崎市
静岡県磐田市
静岡県立大学
大阪府立病院機構大阪母子医療センター
地域保健
へき地保健師協会
特定非営利活動法人みんぷく
特定非営利活動法人コミュニティ・カウンセリング・センター
特定非営利活動法人 place of peace

配布方法：郵送または直接持参

平成 30 年度地域課題調査・研究事業報告書
令和元年 6 月発行

公益財団法人福島県青少年育成・男女共生推進機構
福島県男女共生センター「女と男の未来館」

〒964-0904　福島県二本松市郭内一丁目 196-1
TEL 0243-23-8303　FAX 0243-23-8314
URL　http://www.f-miraikan.or.jp